

『あ、ありがとうございます……♡』

紫央里は仰向けになり、足をZ字に開いてヒクつく秘所を見せつけながら笑みを浮かべる。

『ご主人様こそ、いつも私なんかのために時間を割いて下さり、感謝しています……♡』

『はは、シオちゃんは特別だからねえ。可愛い教え子のためならいくら時間を使っても惜しまないさ』

『ああん♡うれしい♡』

秘所からは液体が垂れ流しになっており、紫央里の顔は完全にメス豚だった。

『ふふふ、もうすぐ合宿だね？シオちゃんはどんな水着着るんだろうね？楽しみだなあ』

『ああん♡はずかしい……♡だって、わたし、変態なんです……♡』

『ふふ、知ってるよ。シオちゃんが僕の言うことをなんでも聞いてくれるドスケベな女の子だってことはね？』

『はい……♡私は……ご主人様に言われれば何でもします……♡』

『ふふ、いい子だね。でも、僕以外の人にこんな姿見せちゃダメだよ？』

『あ、当たり前です！私の身体も心も全てご主人様のもの……♡』

『うわあ……』